

ビールのつぎかた

帝京大学医学部薬理学 中木敏夫

何やら怪しげなタイトルです．これは大げさに言いますと医療関係者のプロ意識がどこまで染みついているかを問う問題なのです．

銀座の一流のママはビールをつぐときにラベルを手のひらで隠すように右手で持つてつぐのである．その理由は，店で使っているビールのライバル会社関係の人がお客の中に同席していることがあり，それを恐れての予防手段なのである．これはある医学部の大教授から私が昔聞いた話です．もっともビールを出すときにはお客に希望の銘柄を予め聞きそうなものだがなあと，そのときは思いましたが，なにせ臨床看護の原稿料では銀座の一流の店には到底行けませんので，この話の真偽のほどを確かめることが出来ないのが残念です．それはともかく，その大教授はさらに続けて，科学者や医療関係者はそうであってはいけない．我々はラベルが良く見えるように，ラベルの付いていない方を右手で（左利きの人は左手で）持ち，つねに，自分が使用している銘柄の名前を確認しながら注がなくてはならない．日頃から，治療や研究を真面目にやっている人ならば，ビールを飲むときでも無意識にその行いが出るものである．だから，ビールのつぎ方でその人の実力は大体分かるのである，と話してくれたことがありました．その大教授の専門領域の講義の内容は私は自慢ではありませんが余りよく覚えていません．しかし，その逸話だけは鮮明に覚えていますし，実験中も思い出すことがあります．もちろん，ビールを飲みたいということではなく，ラベルを確かめるということをです．

患者を取り違えたり，消毒薬を薬と間違えて静脈内注射したり，消毒用エタノールを蒸留水と間違えて吸入させたりという，最近このような信じられない医療事故が後を絶ちません．これは単純ミスとして取り扱われがちですが，患者が本人であるかどうかを確認すること，人体に投与している薬が正しいものであるかを確認することは基本中の基本といえます．いつもやっていることだからとか，これに関しては私はベテランと思った瞬間が一番危ないのではないのでしょうか．マスコミで報道されるまでにいたらないニアミスともいえるケースも含めて，どのようにすればその様な事故が防げるかを是非考えて，予防策を立てることが大切だと思います．もちろん薬の名前を確認することが最も重要ですが，安全弁は多ければ多いほど重大な事故になることを回避できます．手術室では過去の苦い経験から，酸素，亜酸化窒素などガスタンクの色を変えてあります．

これも工夫の一つです．元々色が付いている薬もあります．このようなものは色が一つのヒントになりますが，多くの薬は無色ですから一般的な対策にはなりません．あるいは，変わった臭いのある薬もあります．もしかしたら電車の車掌さんが行うように，前方よし，と実際に指で指しながら声を出して確認することが必要なのかもしれません．外来や病棟では声に出して言いたくない場合もあるでしょうから，薬を確かめ，また点滴バッグからラインをずうっと指で追って，その速さなどを意識的に確認し，「アンピシリン，点滴静注速さ，注射部位よし」と自分の心の中でしっかり声を出して言うことはできると思います．「いそがしーんだから，そんなのんきなことやってられない」という声が聞こえてくるようです．でも考えて下さい．自分の家族や親戚が患者になったときに，取り違い事故が起きた時のことを．

見る以外にも，嗅ぐ，触る，聴くなど，感覚のすべてを総動員して確認することが大切だと思います．ビールを飲むときにも，ラベルの話を思い出して，業務に生かしていただければこの pharmacafe の店主としてはこれ以上うれしいことはありません．ぜひ心がけて頂きますようお願いいたします．